不登校支援実践報告

－附属学校へのサポートプログラム（学生派遣およびサテライト教室）－

澤　京子・栗本美百合
（奈良教育大学　次世代教員養成センター（ESD・課題探究教育部門））
市来百合子
（奈良教育大学 教育連携講座）
谷口尚之・尾本潤治
（奈良教育大学附属中学校）
中窪寿弥・石川元美・加川陽子
（奈良教育大学附属小学校）
谷口義昭
（奈良教育大学　技術教育講座（技術教育））

Support Report for Non-Attending Student at School

Support Program for School Attached to University (Students Dispatch and Satellite Classroom)

Keiko SAWA, Sayuri KURIMOTO
(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)
Yuriko ICHIKI
(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)
Naoyuki TANIGUCHI, Junji OMOTO
(Junior High School Attached to Nara University of Education)
Toshiya NAKAKUBO, Motomi ISHIKAWA, Youko KAGAWA
(Elementary School Attached to Nara University of Education)
Yoshiaki TANIGUCHI
(Department of Technology Education, Nara University of Education)

要旨：次世代教員養成センターの教育臨床・学校カウンセリング領域において、附属小・中学校の多様なニーズのある児童生徒や不登校傾向が生じた児童生徒に対し、学生をサポーターとして学習支援や発達支援を行うプログラムを行ってきた。これまでの成果を考慮のうえ、事業の改善も含めさらにこの事業を発展し附属校の教育相談体制に寄与できるよう取り組んだ。具体的には、附属校の教育相談体制の中にこのプログラム（学生派遣およびサテライト教室）を組み込んで活用できるようシステムを再構築した。

キーワード：不登校支援　Support for non-attending student at school
サポートプログラム　Support program
学生派遣　Students dispatch
サテライト教室　Satellite classroom

1．はじめに

不登校は、児童生徒が学校を長期に欠席することにより、学習と社会性を身につける機会を狭め、児童生徒の人生に大きな不利益をもたらすことになる。不登校にある児童生徒は、学習と対人関係での何らかのつまずきやトラブルのため、本来発達を促進する仲間集団の経験からも遠ざかってしまう。児童生徒自身の持つ性格的な資質により集団生活に馴染みにくく不適応を起こすケースでは、背景に発達障害が起因している場合もあり、合理的配慮に基づく支援が必要な場合も少なくない。松永（2012）によれば不登校状態は、一次的に学校での直接的なストレスから回避することにはなるが、不登校が長期化することで、学習の遅れ

や将来への見通しのなさなどから新たな孤立感や敗北感を募らせることになり、子どもの内的なストレスや葛藤はさらに高くなる。文科省は2016年7月の不登校に関する調査研究協力者会議による報告に基づき、2016年9月「不登校児童生徒への支援の在り方について」と題する通知を出している。ところがこの2017年10月26日には、文科省より平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」に関する結果が公表され、平成28年度は過去50年間で不登校の割合が最も高い結果となった。小子化により児童生徒数が減少している中、平成25年度より4年間不登校児童生徒数は増加しているのである。不登校にある児童生徒には適切な介入が必要となり、教育相談体制の充実が求められる。

平成26年度より、次世代教員養成センターの教育臨床・学校カウンセリング領域において、多様なニーズのある児童生徒や不登校傾向が生じた附属校の児童生徒へサポートプログラムを提供し、心理的なサポートやトレーニングの場を運営している。今回報告する附属校へのサポートプログラム（学生派遣およびサテライト教室）は、附属小・中学校で不登校および適応に課題のある児童生徒に対して、大学生・院生をサポーターとして学習支援や発達支援を行うプログラムである。(以下この大学生・院生をサポートフレンドと呼ぶ)サポートフレンドは児童生徒にとって年上の先輩・兄姉のような関係性であり、一緒に学習し受容的に話を聞いてくれる存在である。附属校における不登校生徒への居場所を確保することや、附属校への学生派遣により児童生徒への支援を行うことを通して、その成長を支える支援システムを開発・発信しようとするものである。さらにこの支援システムにより、附属校での教育実践を側面的に援助するとともに、大学生・院生にはこの体験を通して教育臨床力を高め、教師として教育相談の資質を養成するものである。

２．本支援事業の概要

不登校支援プログラム自体は、平成２６年度から始まった附属校における支援システム開発プロジェクトの流れを汲み、平成２７年度は附属学校園全体で実施された、「インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業」、平成２８年度は、文部科学省の「発達障害の可能性のある幼児児童生徒に対する早期支援研究事業」の中でも併せてプロジェクトとして取り組まれてきた。

これらの支援は「リスクールプログラムモデル」として、附属校における不登校生徒への居場所であるサテライト教室「高畑ほっとヒルズ・アルコバレーノ」を確保し、個別支援や小集団による集団活動を通して、生活リズムや体力の回復と共に、対人関係の適応や自尊感情を促す活動で成果を上げてきた。

さらにカウンセリングとサテライト教室の連携、および附属校との連携、ピアサポート事業との連携、登校へのステップサポートとしての連携を模索していく中で、課題も浮かび上がってきた。児童生徒が登校を再開できるようにするためには、学校との連携を十分に図ることが重要である。連携しやすい附属校ならではのサポートシステムを研究開発することで、効果的な教育相談体制の在り方に寄与できると考える。

そこで今年度は、附属校の教育相談体制の中にこのプログラムを組み込んで活用できるようシステムを構築しなおした。今年度は、人員体制の関係で大学教員は週2日という限定された活動日になり、より機能的な体制づくりが必要となった。不登校児童生徒のアセスメントからサポートプログラム活用、その後の附属小中学校と大学や家庭との連携までを視野に入れ、一つひとつのステップで丁寧に検討することを目指した。サテライト教室の名称も、「高畑ほっとヒルズ・アルコバレーノ」から「高畑ほっとヒルズ・パスレル」と変更した。児童生徒への支援は、学生から生徒に対し1対1対応での支援から開始して相互の信頼関係を築くことにした。児童生徒の状況に配慮しながら、小集団での活動に繋げていくことも視野に入れている。サポートフレンドの見守りの中、小集団での活動を通して児童生徒の自発性や活動性を高め、次のステップである学校集団への適応や仲間との交流に役立てたいと考える。

さらにサテライト教室の2日間だけの支援にとどまらず、必要に応じて附属校への学生派遣プログラム「エール・サポート」を行う。このサポートプログラムは、学校で不登校傾向が生じた児童生徒や適応に課題のある児童生徒に対して、附属校でサポートフレンドが関わることで、その学習支援や発達支援を行い学校への適応を促すことを目指している。またサテライト教室では、居場所的な意味合いもあるが、児童生徒の状況に配慮しながら学校復帰に向けての支援を目指している。そのためサテライト教室からより学校復帰がスムーズに行えるよう、附属校への学生派遣を活用しようとしている。これは昨年度もサテライト教室に通う生徒が学校への心理的な距離を徐々に縮めていった際に、サポートフレンドが生徒に同行して学校復帰を支援した経緯があった。学校復帰のステップとして、サポートフレンドが学校の通級教室や別室で児童生徒の学習支援や発達支援を行うことも有効だと考えた。昨年度まで附属中学校で行われていたピアサポート事業が本年度からなくなったこともあり、その流れを取り入れてサテライト教室との連携をより図ることで、支援を効果的にするものである。

３．サポートプログラムの体制について

３．１．サポートプログラムの目的

サポートプログラムの目的は、附属校の多様なニーズのある児童生徒や不登校傾向が生じた児童生徒への学習支援や発達支援を、大学生・院生の活用を通して行なう。生徒一人につき一人の教員を目指す学生のサポーターが付き、学校復帰に向けて支援する。

プログラムはサテライト教室「高畑ほっとヒルズ・パスレ

ル」（通称「パス」）と学生派遣プログラム「エール・サポート」（通称「エール」）の二つである。これらのプログラムは、附属校のニーズに合わせて柔軟に対応することとする。

また、このプログラムは、学長裁量経費による学生の教員養成の一環として行われ、また教育相談体制の充実についての研究を目的としている。

３．２．サテライト教室「高畑ほっとヒルズ・パスレル」

(1)　サテライト教室「高畑ほっとヒルズ・パスレル」の名称について

「高畑ほっとヒルズ」の名称は、昨年度までの「高畑ほっとヒルズ・アルコバレーノ」を引き継いだ部分として継承した。「パスレル」という名称は、フランス語で「架け橋」という意味があり、語源の「PASS」は、通過するという意味もあって、このプログラムが通過点となり、次の場所への架け橋となることを願っている。

(2)　サテライト教室「高畑ほっとヒルズ・パスレル」の内容について

・居場所づくり：
　トランプ、ゲームなどのさまざま活動を通して人間関係をはぐくみ、家庭や学校以外での居場所を提供し、対人交流を通して自主性やコミュニケーション力を高める。

・自立支援：
　プログラムに参加することで生活習慣の改善をはかり、生活リズムを取り戻す試みをする。

・個別学習：
　本人の進度に合わせた学習をサポートすることで学習意欲を高める。

・体験学習：
　調理や創造活動、スポーツなどを取り入れ、生活体験の幅を広げる。

以上の内容を個々人の児童生徒の状況をみながら活動していく。小集団でのグループ活動やソーシャルスキルトレーニング活動も必要に応じて取り入れていく。

中学校の放課後学習支援などにつなげ、最終的には学校復帰を目指す。

(3)　活動日時・場所について

毎週　火曜日・木曜日
（基本的には１時から３時までとし、柔軟に対応する。）

生徒一人につき一人の教員を目指す学生のサポーターが付き、学習面や、対人スキルの向上、集団適応に向けての支援を行う。活動場所は次世代教員養成センター内の教室で行なう。活動内容によっては、許可を得て大学構内の施設での活動を行う場合もある。

３．３．学生派遣プログラム「エール・サポート」

(1)　学生派遣プログラム「エール・サポート」の名称について

「エール」という名称は、フランス語で「翼」という意味がある。語源の「AILE」では、翼は空気、風、自由を象徴し空を飛ぶ伝令神の持ち物とされており、また広げた翼は保護・信頼をも表している。サポートフレンドとの信頼の元、次のステップへと応援できればと願いを込めた。

(2)　学生派遣プログラム「エール・サポート」の内容について

このサポートプログラムは、学校で不登校傾向が生じた児童生徒や適応に課題のある児童生徒に対して、附属校でサポートフレンドが関わることで、その学習支援や発達支援を行い学校への適応を促すことを目指している。

不登校の未然防止・早期対応のみならず、「パスレル」から学校復帰の際のサポートも行う。

活動内容としては、別室登校支援、授業への入り込み支援、その他不登校児童生徒に係る支援などである。

活動日時は、附属校でのニーズに合わせて行ない、附属校での活動となる。

今年度から不登校支援の体制が新しくなったこともあり、以上の、内容を附属校の教員に周知するために、サポートプログラムについて附属校教員向けA4版チラシを作製した（付録１）。

３．４．サポートプログラムの活用までの流れ

附属校教員向けに作成したチラシ(図１)の「サポートプログラムの活用までの流れ」の部分を抽出したものを図２に示す。

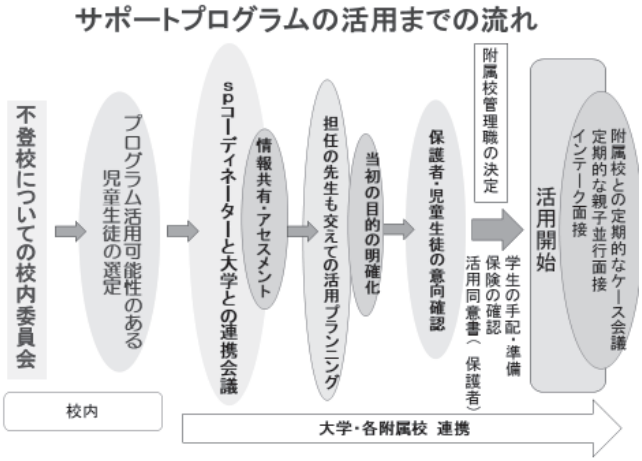


図１　　サポートプログラムの活用までの流れ

(1)　連携について

次世代教員養成センターの教員が、附属校の窓口となる教師や担任の教師と連携を取りながら、学校復帰を視野に入れたプログラムの活用成果を検証していく。そのために、次の附属校内でのサポートプログラムコーディネーター（以下、SP コーディネーター）の設定を依頼した。

(2)　SP コーディネーターの役割

このプログラムは、附属小学校、中学校が主体となって

児童生徒の教育・発達を支援するために活用していくこととなるため、SP コーディネーターが附属校内の窓口となる。サポートプログラムは定期的な連携を図ることを基本とし、情報交換を密に行うための定期的なケース会議をコーディネートする役割を担う。またケースによっては、各学校の通級指導教室や別室への移行に関しての連携も必要となり、その都度担任を交えてのミーティングなども SP コーディネーターが中心となる。

(3)　プログラム開始に向けて

まず各附属校の SP コーディネーターが校内の不登校の状況を取りまとめ、事前に次世代教員養成センターの教員と協議を行なう。アセスメントを行った上でこのサポートシステムが適用可能となった場合に、担任の先生を交えてもう一度協議をする。その後、担任を通して保護者と本人の意向を確認する。保護者と児童生徒の同意が取れた段階で、サポートプログラムの配置の学生を準備し、SP コーディネーターに活用開始日の連絡をする。開始日については、担任を通して保護者・児童生徒へ連絡する。

プログラム活用が決定した児童生徒・保護者に向け、案内チラシ（保護者用）を準備し、プログラムの内容を理解し同意の上開始する。

３．５．サポートフレンドのガイドラインと学生教育

(1)　サポートフレンド募集と面接

チラシを掲示板に張り出したり、次世代教員養成センターの教員がゼミの生徒や授業中の声掛けを行なったりして募集を行った。

不登校支援に興味を持ちサポートフレンドを希望する学内の学生に面接を行い、支援が必要な児童生徒とのマッチングのために登録して備えてもらった。

(2)　サポートフレンドのガイドラインについて

・サポートプログラムで児童生徒をサポートすることに対し臨床現場であることを忘れず、児童生徒の人間的な成長を見守る姿勢を持って真摯に向き合い、学生自身の臨床能力の向上を目指す。

・報告書は毎回作成し、附属小・中学校の担当の教師と担任の教師にまとめたものを送付する。

・このプログラムでは、さまざまな事情（本人の課題や家庭の事情）の情報を共有していきながら、サポートプログラムを活用する児童生徒の発達や成長を支えていくため、支援する学生は個人情報については外部に漏れることのないよう、守秘義務を課し、同意書を提出する。

(3)　学生教育について

サポーターの一人ひとりが教育臨床力の向上を目指し、プログラム終了後に振り返りや次世代教員養成センターの教員とのスーパービジョンとミーティングを行い、振り返りを行なう。

またサポートする学生の資質向上を図るため、研修会を行ない、課題等についても情報交換を行う。

４．今後の課題

附属校の教育相談体制の中にこのプログラム（学生派遣およびサテライト教室）を組み込んで活用できるようシステムを再構築してスタートしはじめ、順調に受け入れ態勢が整いつつある。不登校にある児童生徒は、抱える発達面の凸凹に由因する適応の困難さや、対人面での弱さによる同年代集団への適応の難しさが課題である場合が多い。何らかの発達障害が背景にあり、不登校などの二次的障害を生じた生徒に対する合理的配慮に基づく支援が必要である場合も少なくない。こういったこともあり特別支援教育研究センターとも連携が進んでいる。特に附属校の教職員との連携は重要であり、支援が必要な児童生徒の様々な情報を整理統合し、慎重にアセスメントやプランニングをした上での実践を研究開発することで、効果的な教育相談体制の在り方に寄与できると考える。文科省も平成 29（2017）年 1 月に,「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～」（報告）を公表しており、今後の教育相談体制の在り方として、学校内の関係者がチームとして取り組み、関係機関と連携した体制づくりをあげている。昨今の教育事情からも教育相談体制の充実は急務なのである。また、不登校児童生徒の社会的自立に向けて対応する公的な施設として教育支援センター（適応指導教室）があるが、現在のところ公立校に通う児童生徒が対象になっており、附属校の児童生徒が活用できない現状もある。

現在サポートフレンドの登録も増えており、また附属校からのニーズによりプログラムを実践中である。具体的な実践や成果については次回報告したいと考える。

参考文献

大久保千恵・玉村公二彦・谷口尚之・尾本潤治・山室光生・中窪寿弥・市来百合子・松川利広（2016）,「不登校児童・生徒に対する適応支援活動の実践と「リスクールプログラムモデル」の開―大学における支援の実践と新しいモデルの開発―次世代教員養成センター紀要第 2 号, pp.283-289

松永邦弘（2012）,「発達段階に応じた不登校の子どもへの支援―子どもの発達における内的・外的環境の力動的関係の視点から―」,福岡大学研究部論集

文科省（2016）,「不登校児童生徒への支援の在り方について」通知

文科省（2017）,平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」

文科省（2017）,「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～」（報告）,教育相談等に関する調査協力者会議

・付録１　サポートプログラム案内（附属校教員向け）

奈良教育大学付属中学校教職員用

2017年7月4日

パスレルはフランス語で架け橋という意味です。

高畑ホットヒルズ　サポートプログラム「パスレル」案内

次世代教員養成センターサポートプログラム「パスレル」の目的

附属学校の多様なニーズある児童生徒や不登校傾向が生じた児童生徒への学習支援や発達支援を、大学生の活用を通して行ないます。生徒一人につき一人教員を目指す学生のサポーターが付き、学校復帰に向けての支援します。

このプログラムは、学長裁量経費による学生の教員養成の一環として行われまた、教育相談体制の研究を目的としておりますので、趣旨をご理解の上、ご活用ください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

奈良教育大学次世代教員養成センター　市来　澤　栗本

サポートプログラム「パスレル」の内容

・**居場所づくり**：トランプ、ゲームなどのさまざま活動を通して人間関係をはぐくみ、家庭や学校以外での居場所を提供し、対人交流を通して自主性やコミュニケーション力を高めます。
・**自立支援**：プログラムに参加することで生活習慣の改善を図ったり、生活リズムを取り戻す試みをします。
・**個別学習**：本人の進度に合わせた学習をサポートすることで学習意欲を高めます。
・**体験学習**：調理や創造活動（絵画造形など）を取り入れ、生活体験の幅を広げます。
活動開始時には、アセスメント期間を設け、個々人の状況を見ながら、活動内容を決定していきます。
中学校の放課後学習支援などにもつなげて、最終的には学校復帰を目指します。

サポートプログラムを活用いただくために

①緊急対応や欠席等の連絡が必要となったときは、保護者の方に直接連絡をさせていただく場合があります。そのため、保護者の方の連絡先を大学側にも伝えることをご了承願います。
②複数の児童生徒が同室になる可能性があります。児童生徒にも保護者にもご理解をいただいてください。
③担任の先生方と連携していただくことによって、児童生徒の成長発達がより促されると考えています。生徒の状況によって、学校復帰に向けてのチャレンジデーを、設けますので、よろしくご協力よろしくお願いします。
④このサポートプログラムは、学長裁量経費による単年度プロジェクトです。
（継続は要望していきます。）
⑤このプロジェクトは、サポートする学生に対しても教育現場での臨床力を高めるため、こちらで適時指導しておりますが、ご意見ご要望があるときは大学教員までご遠慮なくご一報ください。

日時について

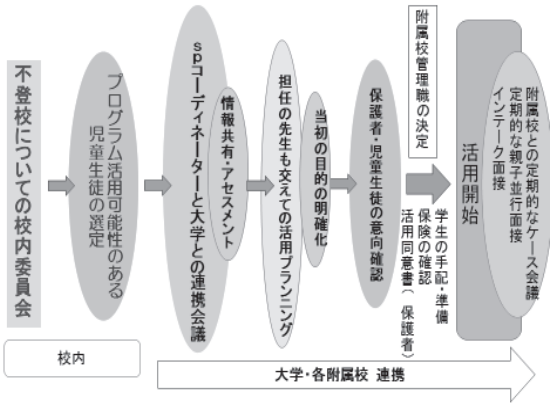
毎週　火曜日・木曜日（　基本的には１時から３時まで　）
生徒一人につき一人教員を目指す学生のサポーターが付き、学習面や、対人スキルの向上、集団適応に向けての支援を行います。

場所について

次世代教員養成センター内の教室で行ないます。
要請があれば、附属学校への派遣も検討いたします。

利用の仕方について

このプログラムを活用する児童生徒の選定に関しては、まず中学校のサポートプログラムコーディネーター（尾本先生）が取りまとめ、事前に次世代教員養成センターの教員と協議を行なう必要があります。その後プログラムの活用が決定した場合に、担任を通して保護者と本人の意向を確認します。

保護者と児童生徒の同意が取れた段階で、活用手続きを行い、大学から活用開始日を連絡をします。保護者・児童生徒へは担任を通して連絡してください。

サポートプログラムの活用までの流れ